



ら進められたまちづくりでありました。当時としては民間主導型で進められたまちづくりという点では、民間の取組みの公益性を問う意味でも、次世代のまちづくりにつながる特筆すべきものがあるといえるのではないのでしょうか。いずれにしてもこの世代のまちづくりは、傑出したリーダーが先導して、次世代へのまちづくりの道を拓いたものであったと思います。

(2) 第二世代

この時代は、住民参加とか行政参加といったような言葉に象徴されるように、まちづくりの主体性が問われていった時代だったと思います。高度成長やバブル経済の崩壊という経験を踏まえて、人口減少、少子化、高齢化、低成長など縮小していく社会が生み出す様々な生活課題が顕在化してきた時代です。加えて、住民の暮らし方が多様化し、それに伴いそれぞれの暮らしの中にある課題への支援も多様化している時代でもあります。

この時代のまちづくりは、目の前にある地域課題解決型の取組みで、多様な意見を出し合いながら、これらの意見を調整しながら、行動目標を作り上げていく取組みであるといえます。このような地域づくりにおいては、調整型リーダーの存在がカギとなります。

愛媛県において、これらのまちづくりが比較的うまく進んでいくことができたのは、愛媛県内のまちづくり塾などの多さが関係していると思われる（平成3年の財団法人地域活性化センターの調査結果による。次頁の表を参照）。これは、愛

え、コンクリートブロックを使った水道であった川が、洪水時には堤内を守り、普段はさまざまな生き物が住める、本来の川の状態に近づけようとする、近自然型川づくりが始まりました。

整備前 昭和62(1987)年



内子町役場本庁舎前

伊予銀行五十崎支店前

整備完了時 平成10(1998)年



内子町役場本庁舎前

伊予銀行五十崎支店前

2 川づくり

明治19(1886)年の風景画(大室山新画 宇野宮神社奉納 町指定文化財)に描かれている景は、五十崎地区の大切な風景です。しかしこの景をはじめ、河原で生きる樹々のなごみは、命がけで生かされたストーリーがあります。住民自らが運動を起こしたことを契機に、小田川は日本で最初の「近自然川工法」の現場となりました。

平成元(1989)年、「あるさとの川のモデル事業」として、小田川が 全国で20,000河川(1級、2級河川)の中で最初の39河川の一つに指定・認定されました。これを機に、それでは川の水を安全に渡すことだけを考

小田川多自然型工法

(内子町観光協会内子ねき歩きパンフレットより)

媛県の施策によって、生活文化若者塾や女性塾など多くのまちづくり組織が生み出されてきたこと、さらに地域コミュニティを中心とした若者の運営によるものも多く、そこで育成されたまちづくりのリーダーの存在が良い方向に影響していると思われる。

そのような背景の下、住民主体のまちづくりが言われ始めました。広域合併後、行政の規模が大きくなったことにより、行政と住民との距離が遠ざかったこと。また、人々の暮らしの多様化に応じたサービスを求めるなど、結果的に行政サービスに満足できない住民が増えてきました。さらに、大規模自然災害が多発してきて、一時的にでも行政サービスが行き届かなかったりしました。このように、行政サービスの限界が見えてきたことなどの要因があるといえます。また、財政的にも税収に基づく行政サービスの維持が難しくなった事情も拍車がかかっている時代でもありました。住民の多様な課題(ニーズ)の解決には、課題に直面している住民が担うことが合理的な場合